

藤森照信・中村昌生・大嶋信道・小川後楽・原広司・速水清孝・隈研吾 著

藤森先生茶室指南

藤森照信・大嶋信道 編



彰
国
社

藤森照信・大嶋信道 編

藤森先生茶室指南

藤森照信

中村昌生

大嶋信道

小川後染

原 広司

速水清孝

隈 研吾

著

彰
国
社





地面から立ち上がった最初の茶室

矩庵



隠れ家から茶室へ。薪のヴォールト天井

薪軒 (ニラハウス)



半身立ち上がって斜面地に立つ茶室

一夜亭



休憩室から茶室へ。炭のヴォールト天井

炭軒 (ザ・フォーラム)



空へ！

空飛ぶ泥舟



天井から吊り下げられた茶室

老徳軒



前口上 藤森流茶室とは何か

藤森照信

400年前に千利休がつくり出した茶室とは閉じた空間である。空間と社会からなる外界に対し自閉を旨として生まれている。自閉が言い過ぎなら内向と言ってもいい。

千利休は畳2枚の極小茶室を三度つくった。臨戦時の仮設の「囲い」¹として天下を目指す秀吉用に急造した「待庵」が最初で、次は大坂城の山里丸の一画に、最後は京の聚楽第の利休屋敷の中に。

「待庵」の外界は戦場である。山里丸のすぐ上には豪壮大坂城が聳え立ち、隣りには天下人となった秀吉の御殿が広がる。利休屋敷は、秀吉が築いた金色に輝く聚楽第の隅に静かに佇む。利休が茶会を開くとき、にじり口から入ったが最後、決して外を眺めることなく、4時間を外界を忘れて過ごした。場合によっては鬱陶しい時間と空間だったにちがいない。

明治以後、近代になり、日本に建築家と建築界が出現してから、内向の季節は二度訪れている。

まず、1920（大正9）年結成の分離派建築会が最初の内向を敢行する。

当時の建築界をリードしていたのは社会政策派で、佐野利器、内田祥三をリーダーとして、内務省と組み、建築の耐震化、木造都市の防火化、貧しい人々の住宅改良を掲げ、着々と成果をあげていた。やがてこの流れの先で、関東大震災復興の一大都市計画が実行され、また同潤会アパートメントがつくられるようになる。

社会政策派は、建築デザインについては『建築非芸術論』を打ち出し、明治のコンドル、辰野金吾により確立されていた芸術としての建築の流路を大きく曲げようとしていた。

芸術表現の行き先に危機を感じた堀口捨己ほかの分離派メンバーは、都市と社会からなる外界に背を向け、自己の内面に閉じ籠り、そこから芸術表現の自立と再生を目指した。

堀口の初期の代表作が東京近郊の田園地帯に立つ小住宅「紫烟荘」（1926年）で、その解説文の表題は「建築における非都市的なるもの」。

都市と社会の実際的要求に正面から応えようとする社会政策派の建築家も、たくさんの建築を、表現としては歴史主義もしくは無味乾燥なコンクリート建築をつくり続けるが、そうした建築の中に分離派は芸術表現のエッセンスを感じることはできず、ひとまず、社会と都市を逃れて田園の小住宅に立て籠もったのである。

大正期末から昭和初期にかけて、青年建築家たちは内向の季節の中にあつた。しかし、その後、彼らは再び社会の中に出てゆくことになる。この辺の事情は、思想的には社会主義思想の建築界への浸透、デザイン上では表現派からバウハウスへの移行、といった問題がからみ、ややこしいので省くが、以後の歴史を辿ると、1935（昭和10）年を境に、分離派系が社会政策派に代わって建築表現のリーダーシップを握り始める。内向と自閉の季節を経験した者が次の新しい季節を切り拓いた、と歴史的にはいうことができる。

なお堀口捨己について触れるなら、分離派のその後の流れに属する前川國男、坂倉準三、丹下健三などが昭和10年代にリーダーシップを握り始めると、彼らが結成した日本工作文化連盟の名譽会長的地位に納まるものの、時代からは一歩身を引き、茶と茶室の世界に深く入り込んでゆく。

仲間や後輩が積極的に社会や時代に働きかけてゆくのを尻目に、内向状態を一人堅持している。その自閉ぶりは徹底し、晩年の姿を見た者はなく、死が確認されたのは、没後11年してからであった。

二度目の内向の季節が訪れたのは、戦後で、70年代のことだった。

戦後の建築界は前川、坂倉、丹下によって推進され、建築のデザインは、戦後民主主義に

ふさわしく社会に開くことが求められ、それに巧みに応えたのが広場とピロティだった。

この広場とピロティの2つにより、戦後という民主主義の時代の社会的要求に前川、坂倉丹下は応え続けるが、1960年、引き続く世代が変化を起す。メタボリズムである。

黒川紀章、菊竹清訓に象徴されるようにメタボリズムのグループは、建築によって社会と時代の要求に応える段階を越え、建築によって社会を変え、時代を動かそうと志す。

戦後の高度成長期を経て、豊かになった日本の社会が消費の時代を迎えようとしたその矢先、メタボリズムは建築という誰の目にも明らかな人工物によって時代と社会の行く先を示そうとした。建築のような本来、固定的で不動な人工物すら、新陳代謝を繰り返しながら、成長し増殖し続ける。

明治に日本の建築界が始まって以来、メタボリズムくらい広く社会に語りかけることに成功した建築運動はないだろう。

拡大する経済と大量消費が日本の社会で始まり、メタボリズムが生まれたすぐ後、奇妙な現象が建築界の一部に観察されるようになる。

1964年、磯崎新の「中山邸」が、1967年、原広司の「伊藤邸」がつくられる。磯崎はメタボリズムへの参加を求められながら「なんとなく馴染めぬものを覚えて断り」、原はメタボグループより少し若く誘われることもなかった。

「中山邸」の中から外は一切見ることはできず、「伊藤邸」は窓はむろん明り取りすら屋根に小さく開いているだけだった。

磯崎と原が先駆的に試みた完全自閉小住宅の動きはおよそ10年間を置いて引き継がれ、安藤忠雄は窓もなく出入口すらわからぬ「住吉の長屋」(1976年)を、伊東豊雄は出入口はドアが付いているからわかるが窓は中庭に向かって小さく開く「中野本町の家」(1976年)を、毛綱モン太は三重の殻の内側に身を隠す「反住器」(1972年)を、世に問う。自閉性住宅について初めて言語化したのは坂本一成で、1969年、「閉じた箱」と明言している。いずれ

も「野武士の世代」に属する。

拡大する経済と大量消費を謳歌する社会に背を向け、閉じた箱の中に閉じ籠ったのである。この時期のことは私も同世代の建築史家として知っているが、時代の流れに馴染めぬものを感じていたし、抵抗したい気持ちもあった。安藤や伊東や毛綱や坂本が自閉したのは、建築をつくるということのエッセンスを守ろうと思ったからだろう。外界を忘れて小住宅の内側に閉じ籠るしか手はなかった。同じころ、伊東は「菊竹清訓氏に問う、われらの狂気を生き延びる道を教えよ」(「建築文化」1975年10月号)と悲痛な叫びをあげているが、小住宅に自閉したからといって建築の本質が生き延びる保証などない、そう自覚すればこそその叫びであった。

一度目は分離派、二度目は野武士。そして、一度目と同じように、二度目も内向と自閉の季節を通り抜けた後、社会と時代の中へ再び打って出て行き、やがて一度目と同じように建築界をリードするようになる。

今の建築界はどんな状況にあるんだろう。日欧米の建築先進国と中国、東欧などの建築新興国とは様相が違う。前者は20世紀建築が成熟し安定状態に達し、鉄(金属)とガラスの箱型建築が主流をなしている。一方、後者では、建築先進国からの建築家が彫刻に近いような個性的で派手な姿を実現している。

20世紀の延長上の大きな箱が都市を埋め、それらに囲まれた広場で建築という名の巨大記念碑が踊りを踊る。そんな光景を21世紀初頭の建築界は呈している。地球を覆い尽くす資本主義がもたらした必然的光景にちがいない。

そんな光景を遠く近く眺めていると、小さな建築が愛おしくなる。小さい建築の中にこそ建築の本質がある、と思ったりもする。

大きな鉄とガラスの箱と、踊りを踊るような巨大記念碑に馴染めないものを覚える建築家

には、茶室に取り組むことをすすめたい。現在、世界に数あるビルディングタイプの中で内
向と自閉をテーマとするのは茶室のほかにないからだ。

でもここに一つ難題が生ずる。住宅の依頼はあっても茶室が付属するなんてまず考えられ
ない。注文があつてこそ設計は始まる。

注文なしでどう動く。簡単なこと、自分でつくればいい。

元々、茶室はそういう体質をはらんで始まっている。秀吉が天下分け目の天王山の戦いに
臨むに当たり、本陣を置いた宝積寺に茶頭の利休が急造したのがかの「待庵」であった。当時
こうした臨時の茶室を「囲い」と呼び、利休はその名人にほかならない。あり合わせの材を
集めてきて、既存の建物の軒の下を囲い、茶を楽しむ。

それくらいレベルの工作は、400年前の堺の商人に出来たのだから今の建築家には
もつとうまく出来る。プロの職人の手を借りずともつくれるし、建築家だから自分のレ
ベルに合うディテールを考えればいい。

もともと建築の中で茶室は一番小さく、大きくても4畳半、小さければ2畳、持ち運べる
程度の小建築に過ぎない。

加えてもう一つ、守らなければならない定形はない。今の茶道界にはあるが、利休のころ
はなかった。1897(明治30)年、武田五一が近代の建築家として初めて茶室を発見したとき、
その魅力は造形の自由にある、と述べている。

でも、実際に3畳相当の茶室を手掛けてみると、ありあわせの材料を集めたり、自分たち
で工夫したりはそう難しくはないが、デザインは迷う。定形ナシの自由に迷う。難しいのは
造形の中に忍び込む恣意性をどう抑えるか。定形ナシの自由に任せて線を走らせれば、現代
の踊る記念碑と同じになってしまう。安全を求めて定形に近づくと現代の大きな箱のよう
に表現の鮮度は落ちてしまう。ふつうの設計の勘所が、周辺条件の少ない分だけより強く求
められる。茶室は建築の結晶、というか基本単位というか、手掛ける人の建築的特性がその

まま露わになる。

近代の茶室のうち私が訪れた中で一番クサミを禁じ得なかったのは、白井晟一が戦後秋田
で手掛けた作で、北山杉の床柱が畳にズブリと刺さっていた。畏友の鈴木博之が伊豆松崎で
石山修武にそそのかされて手掛けた数寄屋も、ミースのクロムメッキの十字柱が畳の中から
立ち上がっていた。

極小空間、建築の結晶、空間の基本単位、としての茶室に定形は無用だが、自分の法のりは何
作かつくるうちに自ずと明らかになってくる。私の場合を述べよう。

- 1 まず、入口は狭く小さくする。小さな入口から潜りこむことで、外界とは別世界のよ
うに感じられる。
- 2 次に、別世界を確保したうえで、窓を広く取り、外が見えるようにする。利休は厳禁
したのだが、狭い空間で外も見えずに自閉するのは鬱陶しいからだ。
- 3 さらにどんなに狭くとも炉を切り、火か炭火を点ずる。火の有無は人の住まい(住宅)
と神の住まい(神殿)を分かっポイントだからだ。
- 4 最後にやらないことを挙げるなら、床の間、畳、障子、真壁といった、いかにも日本
の伝統を感じさせるつくりは避ける。

このようにしてこれまでつくってきた茶室は、日本の一部の人は理解してくれるだろうく
らいの気持ちで続けてきたが、このごろ海外でも理解する人がいるらしく、私の田舎の村の
畑につくった「高過庵」をどこで知ったのか欧米やアジアの建築関係者が見に来るらしい。
人戸70ほどの私の生まれ育った信州の寒村に欧米人が入るのは、70年前の敗戦のとき、武装
解除確認のためアメリカ兵がジープで乗り付け、蔵の中をチェックして以来、と95歳の父親
が言っていた。■

前口上 藤森流茶室とは何か 藤森照信

茶室対談その1 茶の湯の中の茶室空間 中村昌生×藤森照信

- Part 1 藤森流茶室の事始め 薪軒(ニラハウス) 1997
 Part 2 畳と障子排除の理由 炭軒(サ・フォーラム) 1999
 Column 堀口捨己と利休 藤森照信

茶室対談その2 煎茶文化の中の茶室空間 小川後楽×藤森照信

- Part 3 スタートは矩庵、完成は一夜亭 矩庵・一夜亭 2003
 Part 4 自分好みの茶室 高過庵 2004
 Part 5 軽く・強く・素人で 茶室 徹 2006

茶室対談その3 茶室空間に埋め込まれたもの 原広司×藤森照信

- Part 6 イス式茶室のはじまり ビートルズハウス 2010
 Column 「ビートルズハウス」の顛末記 速水清孝

茶室対談その4 茶室の中に隠されたインチキ、そして近代批判 隈研吾×藤森照信

- Part 7 漆喰の白と炭の黒 妙観(チヨコレートハウス) 2009
 Column アートと工場の茶室 藤森照信
- Part 8 台湾の茶文化との遭遇 入川亭・忘茶舟 2010
 Column なぜ空の中に 藤森照信
- Part 9 揺りカゴのように揺れる茶室 空飛ぶ泥舟 2010
 Column 施工現場の縄文建築団 大嶋信道

藤森流茶室 全21作品クロニクル

- ①薪軒(ニラハウス) 1997…230 ②炭軒(サ・フォーラム) 1999…231 ③一夜亭 2003…232 ④矩庵 2003…233
 ⑤高過庵 2004…234 ⑥低過庵【計画案】 2005…235 ⑦茶室 徹 2006…236 ⑧玄庵 2006…237
 ⑨松軒(焼杉ハウス) 2006…238 ⑩茶室 源(コルハウス) 2008…239 ⑪妙観(チヨコレートハウス) 2009…240
 ⑫ブラックティールハウス 2009…241 ⑬ビートルズハウス 2010…242 ⑭亜美庵杜 2010…243
 ⑮入川亭 2010…244 ⑯忘茶舟 2010…245 ⑰空飛ぶ泥舟 2010…246 ⑱ウォーキングカフェ 2012…247
 ⑲森文茶庵 2013…248 ⑳老懂軒 2013…249 ㉑望北茶亭 2014…250

あとがき

装丁 〓 南伸坊

本文デザイン 〓 柳オフィス

茶室対談 その1

茶の湯の中の茶室空間

中村昌生 × 藤森照信

変わる生活、変わらない茶室

藤森 原広司先生に「茶室は、軽い気持ちでやったらいかん」と言われたことがあります。茶室に関しては意外な建築家が興味を持っています。とはいえ、茶室に興味を持つ人と持たない人の差が激しいんですよ。

戦後モダニズムの第一世代の丹下健三さん、前川國男さん、坂倉準三さんは興味を持たなかった。彼らは、伊勢神宮とか桂離宮には関心を持っていましたけど、茶室に対しては持たなかった。これは面白い現象です。第一世代はみんな堀口捨己さんの筋なんです。戦前に日本工作文化連盟(1936年)が設立されて、堀口さんが親玉で、みんなその下にいた。にもかかわらず、茶室については設計も言及もしてこなかった。面白い現象です。そうした戦後の建築界と茶室について、ご存じなのは先生しかいらっしやらない。

中村 いや、それはどうかはわかりませんが。

藤森 それともうひとつ、茶室の初歩的なこと、部屋が小さくなるとか、にじり口とか、茶室の要素についてはいろいろな説があるわけですけど、そうしたことも今さら言うことではないかもしれませんが、先生の口からでないと、私では示しがつかないので。

中村 そんなとんでもない。私でお話できるかどうか。

藤森 先生は、『茶道雑誌』にずっと茶室の話を書いておられますけど、先生が茶室に関心を持たれたのはいつごろだったんですか？ そのあたりからお話しいただけませんか。

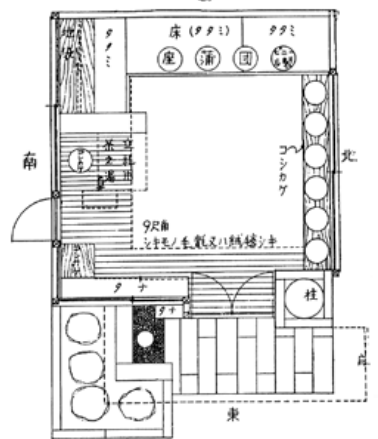
中村 いろいろ思い起こしてはいたんですが、戦後の昭和20年代、特に25(1950)年くらいまでのあいだというのは、その当時の薄っぺらな建築雑誌をご覧になってもわかりますけど、日本住宅の封建制を排除しようとか、床の間排斥とかいう話があった……。

藤森 和風をやめろみたいな話ですよ。極端な場合、木造をやめろという主張もまかり通

った。

中村 そういうことにつながりますかね。そうした諸説ある中で、そんなものでもなからうと。生活様式なども含めて、もつと物事が変わっていくのではないかと。日本になじむ椅子生活という記事も雑誌に載るようになっていましたから。たとえば、お茶にしても、昭和26(1951)年に上野の松坂屋で、新日本茶道展というのがありました。あのときは、谷口吉郎先生と堀口捨己先生の椅子式の茶室が展示されていた。谷口先生は木石舎、堀口先生は美似居(びじきよ)を出品されて。ああいうのを見ると、私はこれからお茶も椅子式、いわゆる立礼式(たてれいしき)になっていくんだろうと。今までの畳の生活(座礼)というのが、だんだん捨象されていくのではないかとという展望を描きました。そうなったときに、これはやはり、日本の建築の伝統というものをしつかりとらまえて、不易流行の原理を見定めていかなきゃいかんと思った。私は、そのために建築史の道へ進むことを考えた。そこで、藤原義一先生が桂離宮を調査される際に同行させていただいて……。

藤森 藤原先生の下におられたんですか？



美似居(びじきよ)

1951(昭和26)年に朝日新聞社主催で上野・松坂屋で開かれた、新日本茶道展覧会のためにつくられた臨時の茶室。名前の「美似居」は「びじきよ」に漢字を当てたもので、ビニールを多用したことにちなむ。

堀口捨己(ほりぐち・すてみ、1885-1984)

東京大学の同期生らと様式建築を否定する分離派建築会を結成。のちに明治大学などで教鞭をとる。数寄屋建築、茶室、庭園の研究者として知られ、新しい和風の創造にも積極的にかかわる。論文の「利休の茶で北村透谷賞を受賞。小出邸(1924年)、紫烟荘(1926年)、旧若狭邸(1939年)、岩波茂雄邸(1957年)などを設計した。

日本工作文化連盟

1936年に結成された組織で、創設委員は25名。黒田清(会長)、堀口捨己(理事長)、岸田日出刀、佐藤武夫、今井兼次、坂倉準三らが名を連ねた。その後、会員は約600名を数える。建築を含めた造形行為全般を工作ととらえ、工芸から都市に至るまでを造形文化として見直す意味で、ドイツ工作連盟を規範としていた。1941年に活動を停止。

谷口吉郎(たにぐち・よしろう、1904-1979)

生家は金沢市の九谷焼の窯元。東京大学卒業後、東京工業大学で教鞭をとり、博物館明治村の初代館長としても知られる。建築家であり、庭園の研究者。藤村記念館(1958年)、東京国立近代美術館(1968年)、東京国立博物館東洋館(1968年)などを設計した。著作に『雪あかり日記』『修学院離宮』などがある。

藤原義一(ふじわら・ぎいち、1895-1965)

京都大学で天沼俊一に師事し全国の古建築、石建築を調査。『日本古建築図録』『京都古建築』の名著がある。遺構による書院造の研究は学位論文となった。武田五一の設計活動にも協力、姫路城をはじめ各地の文化財建造物の修理や社寺建築の設計も手がけ、四天王寺五重塔再建の設計にも携わった。京都大学講師、彦根工業専門学校、京都工芸繊維大学、近畿大学教授を歴任。師風を継承し、美術の土居次義、庭園の重森三玲とともに市民に建築の魅力の啓発にも努めた。

中村 そうです。初めて桂離宮を見たとき、その印象が非常に強烈でしたね。むしろ、社寺建築よりも、こういう建築と向き合っていくことのほうが、日本建築の伝統を未来に伝えていけるのではないかと思つた。しかも、桂離宮のようなものは、どうしても茶の湯の思想を無視しては肉薄できないように思えて。で、創元社の『茶道全集』（1936〜37年刊行）を読んだ、茶の湯の世界を勉強しながら茶室の遺構を見て回つたりしていました。

藤森 藤原先生は、京都大学にもいらつしやいましたよね。

中村 そうです。藤原先生は京都大学を昭和16（1941）年ごろに辞められて、二条城や姫路城の修理事務所におられました。彦根にある今の滋賀大学はもともと経済の学校ですが、戦争中、学校そのものが再編されて、建築科ができたときに、藤原先生が学科長で来られたその当時、僕はたまたま中学4年で、八高の受験に失敗して、なんとかしないとえらい目に遭うぞということで、たまたまここに受かったものだから、名古屋から悠々と疎開していたようなものです。それで、藤原先生にずっと師事することになったわけです。当時、京都大学の構造の棚橋諒先生も講師としてお出でになっていて、卒業後、棚橋先生の研究室に入り、助手になりました。やがて藤原先生が京都工芸繊維大学教授に着任されて、来てくれということ、そちらに移つたわけです。

藤森 桂離宮を通して、茶室に目覚めるようになったわけですね。

中村 そういうことです。
藤森 その後、松坂屋での展覧会があつて、中村先生も椅子式になるだろうと。その予想は外れてよかつたですね。

中村 当時はホントにそう思いました。今のよう到大衆化されて、畳の座礼である茶の湯が伝統的な芸能として続いていくとは思わなかつた。生活様式が変わるとともに、伝統的なものも変わるだろうと思つていました。ところが、あにはからんや変わりませんでした。むしろ、昭和30年代になると流行化とともに定着化に向かつていきましたよね。

藤森 お茶の世界は空前の繁栄期を迎える。

中村 茶の湯の人口が増えて、家元制度も強化され発展しました。

藤森 予想とは相当違うことになってしまつた。

中村 そうです。だから、新しいことをやろうという意欲が削がれてしまつて、むしろ、古典の研究に向かつていつたんですね。そして、ちょうど1950年代ごろに、宇治市が茶室をつくるということで、請われて提出したのが椅子式の茶室でした。

藤森 先生の茶室第一号。

中村 今は図面も何も残つてませんが。結局うやむやになつてしまつて、ふつうの茶室が建てられました。やがて、それを壊して、新しく建て直すということで、20年ほど前に、また私のところに話がきました。そのくらい、物事は変わります。しかし、今度は伝統をふまえて小間と広間と椅子席からなる公共の茶室を工夫しました。

藤森 先生の前に、堀口捨己が戦前からやつておられたわけですけど。

中村 ご存じのように堀口先生の『利休の茶室』が出たのが、昭和24（1949）年なんですけど、あれを見て、私にはとうていこんな研究はできないと思ひました。

藤森 それまで堀口先生とおつき合ひは？

中村 堀口先生のごことは雑誌などで拝見してはいたんですけど、こういう研究をなさる方はどういふ方だろうと。茶碗のことも書いておられるし、茶の湯についても言及なさるし、どうしてこんなに造詣が深いのだろうか。で、初めて先生とお仕事したのは、主婦の友社が『茶の湯全書』（1959年）を出版したとき。「茶室」について私に書いてもらえと先生から言われたということで、編集の方が訪ねてこられました。まだお目にかかつていない先生から指名されたのは、光栄なことですから、必死で書きました。それがきっかけです。その本ができて、初めて先生にお目にかかることができました。

藤森 どんな印象でした？